

# 令和六年度入学試験問題 国語（五十分）

二月一日（午前） 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は11ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答主紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答主紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答主紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督の先生に知らせてください。

受験番号

氏名

東京女学館中学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

くらし  
石垣りん<sup>いしがき</sup>

食わずには生きてゆけない。

メシを

野菜を

肉を

空気を

光を

水を

親を

きょうだいを

師を

さまざまのお経には何が書いてあるのかよくわかりませんが、お経の数も目がまわるほどたくさんあるらしいのですが、中身をぎりぎり凝縮<sup>ぎんしゆく</sup>すると「くらし」という詩に近づき、罪ふかき者どもよ、その罪を悟<sup>さと</sup>って生きよ、ということではないのかしら。それが石垣りんほど、うまくズバリと言えなかったので、かくもたくさんのお経で、手をかえ品をかえ、言っても言っても言い足りないのではないのかしら。とおもったらお釈迦<sup>しゃか</sup>さまは怒<sup>おこ</sup>るのかしら。<sup>③</sup>法事<sup>ほうじ</sup>のお経の長々しさに閉口し、しびれきらしながら思ったことです。

金もころも

食わずには生きてこれなかった。

ふくれた腹をかかえ

口をぬぐえば

台所に散らばっている

にんじんのしっぽ

鳥の骨

父のはらわた

<sup>①</sup>四十の日暮れ

<sup>②</sup>私の目にはじめてあふれる獣<sup>けもの</sup>の涙<sup>なみだ</sup>。

——詩集『表札など』



C、ほんとうに教育の名に値するものがあるとするれば、それは自分で自分を教育できたときではないのかしら。教育とは誰かが手とり足とりやってくれらるものと思つて、私たちはいたつて X ですが、もつと Y なもの。自分の中に一人の一番きびしい教師を育てえたとき、教育はなれり、という気がします。学校はそのための、ほんの少しの手引きをしてくれるところ。高等小学校卒の石垣りんは学歴に関して劣等感を抱きつづけたと何度も書いていて、あるいは自分で気づいてはいないかもしれませんが、自分で自分をきびしく教育することのできた稀な人にみえます。

言葉の名手になれたのも不思議はなく、それにしても、言葉を得る道もまた難いかなと思わずにはいられません。

「くらし」が生きものの持つあさましさをテーマにしながら、読み終えたあと一種の爽快さにひたされるのはなぜなのか。D この詩の中に浄化装置がしまれていて、読み手がここを通過するさい、浄められて、思いもかけない方角へ送り出されるからだと思ひます。

浄化作用を与えてくれるか、くれないか、そこが芸術か否かの分れ目なのです。だから音楽でも美術でも演劇でも、私のきめ手はそれしかありません。

(茨木のり子『詩のこころを読む』より)  
※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

(注1) 浄化作用……悪や罪などを清めて、心のわだかまりを取り除く作用。

問一 文中の A 〽 D にあてはまる語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア やつと      イ おそらく      ウ もし      エ あまり

問二 — 線部①「私の目にはじめてあふれる獣の涙」とありますが、この部分に用いられている表現方法を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 体言止め      イ 擬人法      ウ 倒置法      エ 反復法

問三 文中の詩の形式として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 文語定型詩      イ 文語自由詩      ウ 口語定型詩      エ 口語自由詩

問四 — 線部②「その罪」とありますが、筆者はこの「くらし」という詩の中で、人間のどのような点を「罪」ととらえているのですか。二十五字以内で答えなさい。

問五 — 線部③「法事のお経の長々しさに閉口し、しびれきらしながら思ったこと」とありますが、「思ったこと」の内容としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 仏教のお経はあまりに多様で難しい内容であるため、平凡な人間には一生かかっても理解しきれないし、心にも響かないだろうということ。

イ 仏教の深い教えも、実際に法事を行うお坊さんがもっと短く一般の人々にも理解できるように話してくれなければ伝えることができないということ。

ウ 石垣りんの詩は、仏教のお経が難しい言葉で伝えようとしていることと同じような内容を伝えようとしているのだということ。

エ 本来のお釈迦さまの教えは石垣りんの詩と同じことを伝えているが、現在私たちが聞いているお経はまったく内容が変わってしまっているということ。

問六 — 線部④「受け手も進退きわまります」とありますが、「受け手」はどんなことに気づいて「進退きわま」ってしまったのですか。三十字以内で答えなさい。

問七 — 線部⑤「我中」のに漢字をあてはめて四字熟語を完成させなさい。

問八 文中の ⑥ にあてはまる言葉を文中の詩の中から抜き出して答えなさい。

問九 — 線部⑦「みっともないこと」とありますが、筆者はどのようなことを「みっともない」と述べていますか。もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 打ち負かした相手に対し、何のあわれみも持たないこと。

イ 負けた自分を価値のないものと思い、何もできなくなること。

ウ 負けたくないために、勝負を避けるようになること。

エ 自分が他者を踏み<sup>ふ</sup>にじる存在であることに、怖<sup>お</sup>じ気<sup>け</sup>づくこと。

問十 — 線部⑧「自分もまたある時は誰<sup>だれ</sup>かに食<sup>た</sup>われる存在である」とありますが、「自分」が「食<sup>た</sup>われる」とはどのようなことをたとえていますか。二十五字以内で説明しなさい。

問十一 文中の X・Y にあてはまる語の組み合わせとしてみっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア X 楽観的 Y 悲観的

イ X 受動的 Y 能動的

エ X 積極的 Y 消極的

問十二 — 線部⑨「ここ」とありますが、詩の中から「ここ」が指す部分を探し、そのまま抜き出して答えなさい。



## 二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

一般的に、ことば（単語）はその音から意味を推察することができない。「フィッシュ」「ポワソン」「ユイ」。これらは英語、フランス語、中国語でそれぞれ〈魚〉を意味する単語である。とくに〈魚〉を思わせる音ではないし、互いに音が似ているわけでもない。つまり、ことばの音と意味の間には直接的な関係はない。

しかしオノマトペは違う。「トントン」と「ドンドン」、「チョコチョコ」と「ノシノシ」など、それぞれの単語の音は意味とつながっている。

A 音が意味を教えてくれるのだ。音をちよつと変えて、「チヨカチヨカ」「ノスノス」にしても、軽い感じ、重くてゆつくりした感じは保たれる。普通のことばだとそうはいかない。B サカナの最後の母音を変えてサカノにすると、サカナとはまったく関係ない意味になってしまう。

言語をすでに使いこなしている私たち大人にとって、音声のことばにはそれぞれ指し示す対象があり、意味を持つ、という「名づけ」は、当然のもののように思える。しかし、考えてみると、赤ちゃんはどのように名づけに気づくようになるのだろうか？ 対象それぞれに異なる名前があるということは、実は偉大な洞察なのである。視覚と聴覚を失くしたヘレン・ケラーは、掌に冷たい水を受けているときにサリバン先生が“water”と指文字で綴ると、その指文字とは掌に流れる冷たい液体の名前なのだという啓示を得た。このエピソードをご存じの方は多いだろう。

それ以前にもヘレンは、モノを手渡されるそのときに、サリバン先生の指が別々の動きをしていることに気づいていた。C 彼女が手で触れるサリバン先生の指文字の形がその対象の「名前」だということには気づいていなかった。それまで、指文字を覚え、対象を手渡されれば指文字を綴ることができたが、ヘレンはのちにそれを「猿まねだった」と回想している。ヘレンは、water という綴りが名前だということに気づいたとき、すべてのモノには名前があるのだという閃きを得た。この閃きこそが「名づけの洞察」だ。

名づけの洞察は、言語習得の大事な第一歩である。人間が持っている視覚や触覚と音の間に類似性を見つけ、自然に対応づける音象徴能力は、モノには名前があるのだという気づきをもたらす。その気づきが、身の回りのモノや行為すべての名前を憶えようとする急速な語彙の成長、「語彙爆発」と呼ばれる現象につながるのだ。語彙が増えたと子どもは語彙に潜むさまざまな

パターンに気づく。その気づきがさらに新しい単語の意味の推論を助け、語彙を成長させていく原動力となるのである。

音と意味が自然につながっていて、それを赤ちゃんでも感じられることが、「単語に意味がある」という「名づけの洞察」を引き起こすきっかけになるのではないか。 D<sup>③</sup> 大人は赤ちゃんにオノマトペを多用するのだろう。

赤ちゃんがとくに訓練をしなくても、音と対象の間の対応づけをすることができることは、実験結果で確かに示された。しかし、対象が一つ見つかるだけでは厳密には「ことばの意味」を学んだことにはならないし、そのことばを使うことができない。ことばを使うためには、最初に結びつけられた指示対象だけではなく、他のどの対象にそのことばが使え、どの対象には使えないのかを見極められなくてはならない。

<sup>④</sup> これはなかなか難しい問題である。とくに動詞については難しい。というのは、動詞はおもに動作や行為を指すが、動作・行爲には必ずモノ（動作主、動作対象、道具など）や背景など、動き以外の情報が多く含まれるからだ。

たとえば、図1のイラストのAは「竹を（X）いる」、Bは「カンを（Y）いる」と表現し分けることができる。しかし実は二つのシーンは、I という点でとても似ている。それにもかかわらず、「踏む」は〈足で〉下方向に力を加えることが意味のコア（中核）<sup>ちゅうかく</sup>にあるが、「つぶす」の場合は力を加えるのは足でなくて手でもよいので、〈足で〉は意味のコアには含まれない。後者の場合には、力を加えた結果、もともと厚みのあったモノが平らに変形することが意味のコアとなるので、〈初期状態においてモノに厚みがある〉ことがコアに含まれる。イラストのような一事例を見ただけでは、大人でも到底この意味にたどり着くことはできないだろう。

図1

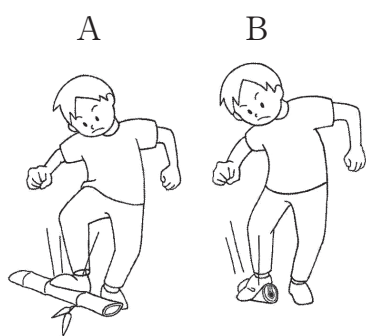
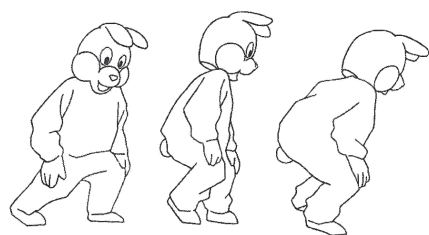


図2





この問題は、アメリカの哲学者であるウィラード・ヴァン・オーマン・クワインが「論理的解決が不可能な問題」として提唱し、彼の出した例にならって「ガヴァガイー問題」と呼ばれている。まったく知らない言語を話す原住民が野原を跳びはねていくウサギのほうを指差して、「ガヴァガイー」と叫んだ。「ガヴァガイー」の意味は何か？ 私たちは直感的には当然「ウサギ」だと思う。しかし原住民は、「野原を駆け抜ける小動物」を指して「ガヴァガイー」と言ったのかもしれない。「白いふわふわした毛に覆われた動物」かもしれないし、「白い毛」なのかもしれない。あるいは「ウサギの肉」という意味だったかもしれない。クワインは、一つの指示対象から一般化できる可能性はほぼ無限にあると指摘したのである。そして、この問題は、ことばを学習する子どもたちがつねに直面する問題である。

図2のような登場人物一人の単純な動きを表す動詞でも簡単ではない。このシーンを見ているときに、「ネケっている」という、オノマトペではない、音と意味の間につながりのない動詞を聞いたとしよう。「ネケっている」とは、「ウサギがしている動き」なのか、「歩いている」なのか、「しこを踏むようにゆつくりのっそり足を交互に踏み出しながら歩く」なのか。その解釈によって、「ネケる」が使える範囲は大きく異なってくる。

実験を見てみよう。3歳くらいの子どもが、図2のようなウサギの動作を見ながら「ネケっている」という動詞を教えられる。その後、クマが同じ動作をしている動画と、同じウサギが別の動作である小股で小刻みに進んでいる動画を見せられ、「ネケっているのはどっちのビデオ？」と聞かれると、どちらかわからない。しかし、「ノスノスしている」という実際には存在しないオノマトペ動詞を教えると、クマが同じ動作をしているほうを迷いなく選ぶことができることがわかった。「ノスノス」には音と意味の対応があるため、どの動作に動詞が対応づけられるべきなのかが **II** にわかるのである。

(中略)

すなわち、人物に注目するのか、動き方に注目するのか、移動する方向に注目するのかという曖昧性のある中で、オノマトペの音は子どもに、どの要素に注目すべきかを自然に教えるのである。オノマトペには音と動作の対応があるので、一般化の基準となる意味のコアをつかむ手助けとなるのである。

(今井むつみ・秋田喜美『言語の本質』より)

※出題の都合上、一部表現のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

(注1) オノマトペ……擬音語(物の音や鳴き声をまねた語) や、擬態語(状態や身ぶりの感じを表した語) のこと。

問一 本文中の [A] [D] の中にあてはまる語として適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(同じ記号は一度しか使えません。)

ア しかし      イ つまり      ウ また      エ たとえば      オ だから

問二 — 線部①「猿まねだった」とありますが、どうしてここでは「猿まね」という否定的な表現をしているのですか。三十  
字以内で説明しなさい。

問三 — 線部②「この閃き」とありますが、「閃き」とほぼ同じ意味で用いられている語を、本文中から三字で抜き出して答  
えなさい。

問四 — 線部③「大人は赤ちゃんにオノマトペを多用する」とありますが、その理由を本文中の言葉を用いて五十字以内で答  
えなさい。

問五 — 線部④「これ」の指す内容として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 赤ちゃんがとくに訓練をしなくても、音と対象の間の対応づけができること。

イ 対象が一つ見つかるだけでは、そのことばを使うことができないこと。

ウ どの対象にそのことばが使え、どの対象には使えないかを見極めること。

エ 動詞が指す動作・行為には、必ず動き以外の情報が多く含まれること。

問六 本文中の (X) (Y) にあてはまる語を、それぞれ五字以内で答えなさい。

問七 文中の **I** にあてはまる語句としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 足を対象に押し付けている
- イ 必ず足で行う動作である
- ウ 足をくり返し動かしている
- エ 大きな足の力が必要である

問八 — 線部⑤「どちらかわからない」とありますが、なぜ「わからない」のですか。次の説明の空欄にあてはまるように十字以内で適当な語句を答えなさい。

「ネケる」という語には、( ) 十字以内 ( ) から。

問九 文中の **II** にあてはまる語句を、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 段階的
- イ 間接的
- ウ 体験的
- エ 直感的

問十 本文では、「赤ちゃん(子ども)の言語発達」について、どのような順序でそれがなされると述べていますか。次のA～Dを正しい順序に並べ替えなさい。

- A ことばに潜むさまざまなパターンに気づくようになる。
- B 音と意味とのつながりを自然に感じ取る。
- C モノには名前があるのだという気づきが生まれる。
- D モノの名前を次々と覚えようとし始める。

三次の短文中の——線部のカタカナを、漢字に直しなさい。

- 1 マドギワに花をかざる。
- 2 時間の関係でカツアイいたします。
- 3 ランオウに砂糖さとうを加えてよく混ぜる。
- 4 受賞記念のシユクガ会を開く。
- 5 魔法まほうの呪文じゅもんをトナえる。
- 6 バンパクを見に大阪へ行くのが楽しみだ。
- 7 白旗を上げてコウサンする。
- 8 多くのカオクが立ち並ぶ通り。
- 9 今のところ赤組がユウセイだ。
- 10 楽しそうにクチブエを吹く。

